

高校国語教育

2008年(夏)号

三省堂

巻頭エッセイ——恩田 陸
図書室という場所

教室で「国語」を学ぶ
これからの国語教育へ
実践交流

CONTENTS

巻頭エッセイ

図書室という場所

恩田 陸

1

教室で「国語」を学ぶ

教室で評論文を読む〈意義〉

岩崎昇一

4

——『高等学校国語総合』『高等学校現代文』改訂版を素材にして

小説の「読み」とは —— 「ことばの森」をくぐり抜けて

森下治生

6

古文を楽しむ —— 『徒然草』『大鏡』を一例に

伊東玉美

8

漢文の〈思想分野〉の背景と意義

瀧 康秀

10

談話室 ことばの獲得

—— 異世代、異文化の人たちとの交流をとおして

北島公之

12

これからの国語教育へ

高校国語のこれから —— 新学習指導要領における科目改訂について

高木展郎

13

「敬語の指針」の考え方と今後の学校教育における敬語教育の方向性

蒲谷 宏

15

実践交流

返り点の指導二案 —— 『高等学校国語総合 改訂版』を使って

池田 宏

17

身近な事例で例証していく論説文を理解し、レトリック感覚の意味を考察する

奥蘭哲也

18

—— 「コインは円形か」(『新編国語総合 改訂版』)を使って

三省堂『明解国語総合』を使用して

石川孝邦

19

—— 実業校の実態に即した使い易さ、わかり易さを実感

「三省堂国語教科書」訂正のお知らせとお願い

20

図書室という場所

恩田 陸

子供の頃、私は図書館に行ったことがなかった。

本に対する執着が大きかったせいである。手に入れた本は全部手元に置いておきたかったので、いったん借りた本を返す、というのが苦痛でたまらなかったのだ。それは漫画雑誌でも同じで、いったん買った雑誌を手放すというのは考えられなかった。当然、購読雑誌が増えるにつれ、どんどん部屋が埋まっていく。母親が増えた雑誌を処分してもよいかと言おうものなら、それこそ「絶対嫌だ」と身をよじって抵抗した。しかし、転勤族だった我が家には「引っ越し」という大技があり、集めたバックナンバーは、その都度あえなく処分されてしまったのであった。

だから、小学校時代、図書室は大好きだったが本を借りたことはあまりなかったと記憶している。当時、授業に「図書室」というコマがあり、それは図書室で調べ物をしたり本を読んだりする時間だった。私は気に入った本ばかり繰り返し読んでいたし、更にその本を

親にねだって買って貰っていた。しかし、学校図書室

用の本だったのか、ついに書店で見つからなかった本、何度繰り返し図書室で読んだか思い出せないほど好きだった本は今でも覚えている。『オレンジ色の猫の秘密』はその中でも特に印象に残っている一冊で、世界十カ国の児童文学作家が書いたリレー小説という珍しい形式。日本からは今江祥智さんが参加しておられ、イラストを山藤章二さんが描いておられた。

小学校の図書室の思い出で、今でも不思議に思っていることがひとつある。

私は小学校六年生の一年間を秋田で過ごした。この小学校六年生という時期は、SF小説に目覚めた時期として私の中では位置づけられている。それはこの小学校の図書室にあったと思う。とても天井の高い図書室で、天井近くに全集ものが置かれているのはどこも同じだが、ここには早川書房の世界SF文学全集があったのだ。こう書きながらも、私は内心半信半疑で

ある。小学校にこの全集があるというのは、あまりに凄くないか？ もしかして、中学か高校の図書室と記憶を混同しているのではないか？ しかし、私の記憶の中ではこの図書室で、その背表紙をじっと見上げていたことになっている。読んだ記憶はない。確かその全集は、禁帯出扱いだったので、借りて返すことに耐えられる自信がなかったからだ。憧れのSF、それが図書室で見上げていた世界SF文学全集のイメージとぴったり重なっているのだ。そこにそれが本当にあったのか。願望とか、夢で見た光景を記憶にすりかえているのではないか。今も謎である。

「借りて返す」という行為によく慣れたのは中学生になってからだ。この頃から乱読時代に突入したので、「読みたい本を全部買っていたら、今の小遣いでは全然足りない」という単純な事実気付いたためである。いちばんお金のなかった学生時代は、学部の図書室や区の中央図書館など、とにかく借りられるところから借りまくった。今のようにバーコード管理ではないので、処理できる本の数に限りがあったのだろう。一度に借りられる冊数は少なかった。すぐに読み終わってしまうので、まめに通って数を稼いだ。それでも、借りて気に入った本を買い直す、という習慣は変わりなかったし、それは現在に至るまで脈々と続いている。いちばん好きだった図書室は高校の図書室である。

それも、夏の、窓を開け放した図書室。

窓の外には青々と繁った木があって、時折すうっと涼しい風が入ってくる。どっしりした大きな古い木の

テーブルの、ひんやりした感触。

「図書室」という場所をイメージする時、思い出すのはあの場所だ。夏のイメージしか浮かばないのは、私の高校は職員室と医務室以外に暖房がなく、冬の図書室は寒すぎて本を読むどころではなかったからだ。

図書室といえば、子供の頃から、萩尾望都の漫画『トーマの心臓』の影響か、「好きな人が読んでいる本を追いかけて読む」という行為に憧れていた。しかし、実際のところ、クラスが違えば何を読んでいるかなんて分からないし、そもそも私が好きになる男の子は本など読まない子ばかり。早々に夢の実現はあきらめたけれど、本の後ろに貼ってある「この本を読んだ生徒の履歴」というのはなかなか興味深いものだった。意外な本に意外な名前を見つかったり、同じ人が何度も借りていたり、結構前に購入されたいのに誰も借りていなかったり。どんな本を読んでいるかは重要な個人情報である、という認識が広まってきているので、きつと今後は学校図書室の本も他人には借りた人の履歴が分からない方向になっていくのだろうが、そういう密かな楽しみも否定されてしまうのはなんとなく淋しい。この、本の見返しに貼ってある貸出履歴というのは、ミステリのネタになりそうだな、と長いあいだ考えていて、ようやく使うことができたのが「図書室の海」という短編小説である。

かつては「図書室の本を全部読んだらしい」悪魔的に頭のいい卒業生の伝説、というのがこの高校にもあったものだ。実際、私と読む本の趣味が似ていたの

か、一時期、借りる本借りる本、どれにも必ず同じ男子の名前があった、という経験がある。私とは入れ違いに卒業していた生徒だったが、その筆跡がとても癖のある筆圧の強い字で、以来私には「頭のいい男の子は字が汚い」という先入観があるのである。

二年くらい前に、久々に母校の高校を訪れる機会があり、図書室に行ってみた。

二階の外れ。窓の外の青々とした枝。

記憶の中の風景と変わらぬ場所です。OBが書いた本、というコーナーができていたのが当時と異なるところで、私の本も多数並べてくれていたのが照れくさかった。しばらく中をうろろし、なんとか手に取った本をパラパラ眺めていたら、とある本の後ろの履歴に私の名前を見つけて「おお」と懐かしくなった。

その本とは、恥ずかしながら、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』である。

高校の図書室で借りた本で強く印象に残っているのは、この本とキイスの『アルジャーノンに花束を』という、我ながらベタな青春時代であった。ついでにいうと、私が本を読んで初めて泣いたのは三浦綾子の『塩狩峠』で、二番目が『アルジャーノンに花束を』だった。しかも、『塩狩峠』はクライマックスの場面ですぐしゅぐしゅ泣いていたのに、『アルジャーノン』のほうは、読んでいる時はなんともなかったのに、読み終わって訳者あとがきを読み始めたら、いきなりダーンと涙が溢れてきて、「あれ？ あれ？ なんて？」と、泣い

ている本人にもその理由が分からなかったことをよく覚えていた。

図書室。その言葉と場所に、なぜか気恥かしさと甘酸っぱさを感じてしまうのは私だけだろうか。本好きだと表明するのは、けっこう勇気がいるものである。個人の趣味と知的レベルを曝け出すのは、思春期にはたまらなく恥ずかしいからだ。それだけに、本の話でできる友人を見つけると世界が明るくなったような喜びを覚えた。本の話をした友人のことは今でもよく思い出せるし、何の本の話をしたかまで覚えている。

今も私の一部は、いつも夏の午後のあの図書室で、吹き抜ける風を感じながら本を読んでいるような気がしてならない。

恩田 陸（おんだ りく） 作家。一九六四年、宮城県生まれ。ファンタジーノベル『六番目の小夜子』でデビュー。さまざまなジャンルの小説で幅広く執筆。『ノスタルジーの魔術師』と称される。二〇〇五年『夜のピクニック』で第26回吉川英治文学新人賞、第2回本屋大賞を受賞。

教室で評論文を読む

〈意義〉



—『高等学校国語総合』『高等学校現代文』
改訂版を素材にして

岩崎昇一

身近な問題発見から、普遍的テーマへ

活字離れが著しいなかにあつて、物語や小説ならまだしも評論文ともなると、生徒が自主的に書店で買って読むのは稀だろう。あるいは、受験対策として新聞の社説ぐらいは読んでいるかも知れない。いずれにせよ、生徒にとって評論文は、学校の国語の授業で（やむを得ず）読まされるものである。

だからこそ評論文の扱う内容や対象は厳選される必要がある。生徒の身近な話題から入って普遍的なテーマへと至る深みのあるものが望ましい。一体なんのために評論文を読まされるのか、その意図が見えないと生徒が、評論世界に入つてこれなくなる可能性もある。まず身近に起きている問題に気づかせるところから評論読解は始まるが、そのためには事前に調べ学習を導入するなど、授業展開に工夫が求められる。

常識の裏側へ——批評精神の育成

多様な価値観が錯綜し、将来像が掴みにくい現代社会を分析してみせてくれる評論文は、われわれに物の見方や生きる

指針を示唆してくれる。筆者の、社会に切り込む視点に導かれて、広く〈批評精神〉を養成するところに評論文授業の目的の一つがあるが、同時に〈批評精神〉は、自分自身にも向き合い、自己の言動を自覚的に考えていく姿勢（倫理）を育てるだろう。また評論文を読むことで、自分の考えや意見が喚起される。だが、単なる好悪などの〈感想〉をこえて説得力のある反論（あるいは賛成論）をするためには、常識を覆す問題意識とそれなりの説得力のある論旨が要求される。

今日、新聞やテレビ、インターネットの普及が、多くの情報をもたらしてくれているが、その一方で、できあいの知識や通念を鵜呑みにしたコメントや〈常識〉が流布していることも否定できない。安易な解釈や通念を打ち破つて、リアルな現実認識に至るためには、体験に根ざした持続する思考と、鋭利な批評精神に裏打ちされた知識や論理が求められる。それらの能力を育成するのが評論文の授業である。

意見交換の素材——賛否を問う、小論文問題への展開

実際の授業展開でも、筆者の意見や考え方に対するディベートの時間を設定すると議論が白熱することがある。特に文化やマスコミ報道など生徒に関心のあるテーマが素材となるとそうである。生徒も今日的な話題に決して無関心ではないことが明らかになる。テーマに対する生徒の思いや考えを引き出す糸口のひとつが評論文の授業である。評論教材を使って、教室で意見を交わし合うことで生徒の社会への関心や理解はいつそう深まる。

その意味で、評論文の授業は国語表現や小論文対策と密接に対応させて見ること新しい広がりを持つだろう。すでに

三省堂版『高等学校現代文 改訂版』(と『新編現代文 改訂版』)では、推薦入試等に対応すべく(批評のまなざし)と題して、小論文課題を設定し評論文の新しい展開を提案している。教室におけるディベートや小論文演習では、あえて反対(あるいは賛成)の立場で論陣を張らせて論戦を闘わせるなどして、評論文の読解力を向上させるのも興味深い試みである。

的確な読み取り — 訓練の場

多様な展開を可能にするためにも、高校の評論教材の授業では、テキストの正確な読解と筆者の意見(考え)の読み取りが基本に置かれる。読み手の思い込みや勝手な解釈を排して、書かれている内容を文脈において的確に理解する訓練が評論文の授業では大切である。

例えば『水の東西』(山崎正和)はいささか古風な二項対立による比較文化論ながら、評論文入門に適している。全体の論理構成や形式段落を整理すると共に、対立する語句の意味も的確に理解させることで評論文の基本的構造を学習させた。さらに指示語の読解や「鹿おどし」「噴水」などの例示の意味理解を通して、筆者の見解をきめ細かく学習できるようにしている。その意味で、この評論文の読解作業は、日本語による論理的文章の読みの訓練の場になるだろう。

評論教材を横断的に読む — 視野の広がり

ひとくちに評論教材といっても、扱われている主題も視点もさまざまである。しかし、それでも時代の要請に応えるようにして編集者たちが選択した評論教材や、その配列には偶然とばかりはいえない、ある共通項があるように思える。

例えば、『高等学校国語総合 改訂版』では、評論教材の充実をひとつの理念として編集されたが、評論(二)には『情報流』(西垣通)、『命はだれのものなのか』(柳澤桂子)、『地球の有限性と人間—人口問題の視点より』(竹内啓)の三本の新しい評論文が並んでいる。『情報流』は情報学の視点から「近代的個人の絶対視」を批判的に論じた評論だが、その基底にある考えは「命あるものつながりを新たな知見から説き明かすのが、情報学の役割」であると説く。それに呼応するように『命はだれのものなのか』では、まさに〈命〉の問題について、自己体験に基づいて真っ向から取り組み「一人の人の命は多くの人々の心の中に分配されて存在している。分配された命は分配された人のものである」と述べている。さらに『地球の有限性と人間』では、「自然との緊張関係の中で最もたいせつなことは人間が協力し協働することである。人間相互の対立と紛争は事態を悪化させるだけである」と論述している。このように三者の評論文は、現代社会の諸相をそれぞれ個別のテーマで論じているものでありながら、その基調に人間の〈命〉をみつめ共に生きる姿勢を読み取ることができるのである。

教科書はすぐれた評論文のアンソロジーでもある。教材ごとに単独で読解してもよいが一冊の書物として横断的に読むと、視野が広がるとともに新たな発見と読みの深まりがもたれられるにちがいない。

いわさき しょういち 高校の国語の教師となって二十九年。ま

た国語教科書編集にたずさわって十数年になる。現在は、東京都立国際高校で、国語とともに小論文・受験指導にあたる。

小説の「読み」とは

——「ことばの森」をぐり抜けて



森下治生

風はどこから吹いてきたのか？

「「ころ」の授業終盤、「先生と遺書」のテキスト終章近く、「先生」がKの自殺を発見する場面に、こういう記述がある。

「私は枕元から吹き込む寒い風でふと目を覚ましたのです。」

いつもこの場面の授業では、黒板に下宿の間取り図を板書し、(図は夏休みの課題として全文を読ませ、書かせておく。)

そこから当日のKの行動を推理するのだが、板書をしながらいつもは気にしないで読み過ごしていたこの一行に目がとまった。

風はどこから吹いてきたのだろうか？

Kの居る4畳の部屋との間の襖は、「この間の晩と同じ位」

(2尺ほど)開いていた。冷気は気温の低い方から高い方への対流によって流れ込む。つまりその時、Kの部屋は何らかの理由で、「先生」の8畳よりも気温が低かったことになる。冷たい外気が入ったとすればどこから？ Kが外出した様子

はない。とすれば、外気は南面の障子を開けたことによって入ってきたのではないか。そして障子の向こうには、お嬢さんのいる6畳がある。

だとすれば……想像はさらに膨らんでいく。そして、死の直前、障子戸を開けてお嬢さんに最後の挨拶をするKの姿が浮かび上がってくる。

Kの遺書には、お嬢さんのことは一言も書かれていない。そこには逆にKのお嬢さんに対する強いこだわりが感じ取れる。「先生」とKの部屋(あるいは心)を仕切る襖は、「この間の晩(Kが夜中に不意に寝ている私に声をかけた)」と同じくらい開いていた、とある。「この間」とは、まだ「先生」がお嬢さんに結婚を申し込む以前のことであり、Kがそのころすでに自殺を考えていたとすればKの自殺の原因は「先生」の裏切りではないことになる。しかしKはやはりお嬢さんのことを忘れられなかった……。

Kはお嬢さんの部屋へとつながる障子をそっと閉じ、最後に「先生」の部屋との仕切りの襖を開ける。Kと「先生」との心の仕切りは、その時、60センチだけ開かれたのだ。

書かれていること的前提を読む

一般に「ころ」の教科書のテキストはKの死の発見の場面が終わることが多い。三省堂版の現代文の教科書では、次の章、つまり奥さんにKの死を伝えるまでが採録されている。Kは、死後の始末を「先生」に依頼し、土曜日の夜に自殺したのだ。翌日はみんなが家にいる。なぜその日を選んだのか？ そもそも、Kは、外ではなく、なぜこの下宿で命を絶ったのか？ そこには、意識においては近代的自己を貫こうとして

生きながらも、身体的な無意識において、お嬢さんや奥さんとの、本来自らが否定してきた〈家族〉の温もりを求めてしまった、Kの分裂した姿が見える。その明治近代的な分裂こそがKを死に追いやった犯人だ。その行きどころのない魂の「淋しさ」が、最後には、お嬢さんではなく、「先生」の部屋への襖を60センチだけ、開かせたのだ。

「語る」「綴る」「つづ」が意味するもの

人は、「自己」としてしか存在し得ない。「他者」との間には超えられない懸隔がある。だからこそ人はことばによって「他者」に架橋しようとする。換言すれば、コミュニケーションとは、不可能性を前提として成立する逆説的な行為である。遺書を綴りながら、Kの自殺の原因について、「先生」はある認識へとたどりつく。

「私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくってしかたがなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。」

Kの自殺の原因が失恋でも現実と理想との衝突でもなく、「淋しさ」であつたとの思い、それは自己省察によるKの発見であり、またKを通しての自己発見でもあつた。「先生」は遺書を綴るといふ、自らを「語る」行為を通して初めて、襖を開いたKの黒い影の中にある淋しさを見いだし、同時に、同じ淋しさの中にある自己を見いだしたのだ。

「つづ」の「森」をへぐり抜ける

人はことばによって、「他者」に向けて「語る」ことによつて、「自己」を発見し変容していく。そしてそれは決して「語

り手」から「読み手」への一方通行ではない。「語り」を受容する側の「聞き手」「読み手」もまた、「聞く」「読む」行為を通じて、自らの内部で「語る」ことにより、物語を形成し、自己を変容させていくのだ。

『新編現代文 改訂版』（三省堂）所収の「飛行機で眠るのは難しい（小川洋子）」では、偶然飛行機で隣り合わせた男の語る「眠りの物語」が「聞き手」である「わたし」を浄化し、「わたし」は恋人への愛しさを取り戻す。「山月記」では、主人公・李徴は、草叢の中から親友・袁修につらい自己を語る中で最後に人間らしい心を取り戻し、醜い虎と化した自己の真実の姿を晒して去っていく。

人は「語り」といふ、「ことばの森」をくぐり抜けることにより新しい生の可能性を見いだすことができる。そういう観点で見えていくと、「舞姫」の太田豊太郎の手記、「レキシントンの幽霊」の「ぼく」の語り、「原爆・平和教材」である「夏の花」などのテキストもまた新しい相貌で私たちの前に現れてくる。

授業も同じことだ。私たちは教室という共有空間で、小説という深い「ことばの森」の中を、煌めくことばの光の中を、ゆつくり楽しんで歩いていこう。生徒とともに、私たち教授者自身が、読みを通して新しい自己と邂逅するために。

もりした はるお 東京都立文京高校教諭。近・現代の文章を中心に約三十年、高校国語教科書編集に携わってきた。

古文を楽しむ

『徒然草』『大鏡』を一例に



伊東玉美

現代の感覚との異同

大学の国文学科を志望してきた学生の中にも、古典文学に関心のある者とそうでない者がいる。新入生対象の基礎演習で、私は『徒然草』を好んでとりあげるが、今の大学生で入学前に『徒然草』を通読したことのある学生の比率は私が想像するよりずっと低い。よって「好きな章段を選んで発表しなさい」は成り立たず、一年間の蹴立はこちらが立てる必要がある。その際注意しているのは、『徒然草』らしさを体得できるようにすること、学生たちが討論しやすい章段を選ぶこととである。

住居論、恋愛論、友人論、さまざまな美意識、武士や成金に対する感覚、女性論、専門家論、老人若者論、どれも議論は盛り上がる。その中で学生たちは自分たちの考えばかり述べ立てたいわけではなく、いかにも「古典」らしい部分に興味を持つ場合もある。例えば第七二段、

賤しげなる物、ゐたるあたりに調度多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽に石、草木の多き。家の内に子孫の多き。人に逢ひて言葉の多き。願文に作善多く書き

載せたる。

多て賤しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

(『新日本古典文学大系』)

格好悪いものを、数の多さから考えることの面白さや、それぞれのものがなぜ賤しく見えるのかといった勘所を彼らは当然拾っていくのだが、その中で「塵塚の塵」が多いのは悪くない、という部分では、「ゴミがきちんとゴミ箱に捨てられている」というのはよく掃除されていることの現れだから」とか、「本棚ががらがらよりぎっしりのほうが気持ちがいいように、せっかくならゴミもしっかり集められているほうが手応えがある」など、いろいろな解釈が試みられる。そこで佐竹昭広・久保田淳校注『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』が脚注で「内裏の右兵衛の陣に、宮中の塵を毎朝掃き集めて捨てた、塵山と称する塵塚があった」といふ：この塵山などを連想して書くか」と述べているのを手がかりに、内裏に特別な心情のあった時代、こうした裏方の場所に至るまで何かゆかしい気持ちがある、といった心理的伏線に加え、塵塚ならぬ塵山が歌題にもなっていたという和歌の伝統、そして宮中を掃き清めた時に集めてくる塵には、春の桜、秋の紅葉といった季節ごとの雅な塵もあってみれば、そんなところにも歌人兼好は意外な風情を感じとっているのかも、といった別の解釈の可能性をこちらが語り添えると、学生たちは驚くほど反応してくれる。現代にも共通していることが古典で表現されているために関心を持つ場合もあれば、もはや我々が見失っている何かを発見することで、知的好奇心を刺激されることもあるのである。

商取引は後る暗い？

例えば『大鏡』序の冒頭部分を題材に話す時も、こうした価値観の遠近感を指摘する方法は有効だと思う。

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、軀と行き会ひて、同じ所にぬめり。…
〔『新編日本古典文学全集』〕

大宅世継・夏山繁樹らが奇遇にも再会するこれに続く場面で、物語の語り手は二人のやりとりを二回の「言ふめれば」で描写する。

短い間に三回推量の助動詞「めり」が使われるのはなぜだろう。人混みの中で年寄りたちと語り手との間には多くの人が行き交っており、彼らの姿が見えたり隠れたりするため、「同じ所にいるらしい」「〜と言っているらしい」となるのである。

そして繁樹が「貞信公が藏人少将だった時代に私はまだ童だった」と語るのを聞きとがめ、「少しよろしき子ども」だけが周りに集まって来る。藤原忠平の若い時分、と聞いて逆算できるのは、一定以上の教育を受けた人、当時の社会でいえば身分のある「よろしき者」だけなのである。

このように『大鏡』の冒頭部分には、よく考えられた表現や描写が用いられていることがわかる。適切な言い回しが読者を惹きつけるのは今も昔も変わらない。

繁樹はまたこの話の続きで「私の養父が主人のお使いで市に買い物に行った時、私の生みの母が乳飲み子の私を抱えて養子先を探しているのを見て、かわいいと思ってもらいけ

たのだ」と語るのだが、ここで、当時の市場について話してみると、学生たちは興味津々で聞いてくれる。網野善彦氏らが繰り返したべられたように、商取引というのは、古代社会では一種後る暗いことで、公然と行ってよいことではなかった。だから、だれの所有かはつきりしない、村境や橋・河原のような、何かと何かの境目の地で行われることが多かった。しかし、都市に商取引は不可欠なので、平安京の場合は東市・西市という指定された市場があった。

ところで商取引はどうして後る暗かったのだろうか。それは、当時の社会に、物は本来、もともとの所有者のもとから動かすべきではない、という考え方があったかららしく、鎌倉時代以降頻発された「徳政令」というのも、土地が本来の持ち主の手を離れて転売されるのを食い止めようとするものだった。

「他の人に売るべきでない物」とはどんなものだろう―現代なら麻薬とか売春とか人身売買とかいったことが浮かぶだろうが、考えてみれば、繁樹は銭と交換で本来の親から心やさしい養父に引き取られたのだった―。

こんなふうにして、古典の昔と現代とで、変わったものと変わらないものに思いをめぐらしてみるのは、関心の濃淡のある学生に向けて古文の楽しみ方を語る時の、手がかりの一つになるのではないかと思う。

いとう

たまみ

白百合女子大学国語国文学科教授。専門は中世の説話文学。著書に『院政期説話集の研究』（一九九六年 武蔵野書院）、『小野小町―人と文学』（二〇〇七年 勉誠出版）など。

漢文の〈思想分野〉の

背景と意義



瀧 康秀

三月下旬の新聞紙面において、終身雇用を支持する人の割合が九割近くにのぼるといふ調査結果を独立行政法人労働政策研究・研修機構が発表した、という記事を目にした。先行き不透明の今日、安定志向が強まっている結果であろう。ただし、会社が社員の生涯に一定の責任を持ち、社員は応分の忠誠を会社に尽くすということを前時代的とは感じず、むしろ理と情とに適っていると感じる人は、欧米に比すれば、常に多数派であろう。このことの背景に存する思想・文化的要因については高校生に読み解かせるのを、地歴・公民科にだけ任せてしまうのでは惜しい。

儒家の思想

漢文の思想分野における必須の教材に『論語』と『孟子』とがある。両書の学習における重要な理解事項として、孔子の教えの中心に仁があるということ、孟子のそれには仁義として仁義礼智の四徳があるということが挙げられる。そしてこれこそが、今日まで東アジアの思想・文化の基盤の一つとなった儒教倫理の原点であると指摘できる。孔子の仁、孟子の四徳は、漢の武帝に仕えた董仲舒とうちゅうしよが継承し、ここに仁義礼智の五徳が唱えられ、これが五常（人の守り行なうべき五

つのだ）として確立した。そしてこの五常が人間関係の基本たる君―臣、父―子、夫―婦の三綱（三つの根本的道義）を支える人間性とされた。

漢代以降、儒教が国家の秩序を守る教学として位置づけられるが、これはこの三綱五常を秩序原理とした礼を重んじることよって社会秩序の維持を目指すものであった。そしてこの儒教倫理は、一身から家、家から国、国から天下へと押し広げていくことを志向した。その結果、父が父らしく、子が子らしくあることが、君主が君主らしく、臣下が臣下らしくあるということにつながり、家族倫理の確立こそが、国家の確立の基盤となると考えられた。

家族という、最も身近なレベルの秩序を、社会や国のレベルの秩序の母体と考える儒教倫理は、集団に属することに安心を感じ、組織で秩序を守りつつ動くことを好み、個が集団に貢献する、いわばチームプレーを得意とする、東アジアに特徴的な社会を生み出す要因ともなった。これには歴史的に光と影の部分があることを含めて、我々の社会のさまざまな事象について考えさせるとき、ぜひ注目させたい点である。そして、『論語』『孟子』をはじめとする思想分野の漢文教材を用いた学習が、古代から現代へ、中国から日本へ、という、時空の広がりの中で、思想・文化を読み解かせる契機ともなろう。

儒教の再評価

ちなみに、儒教は近代中国において痛烈に排撃されてきたが、今その再評価が大規模に行なわれているということも、学習者に事実として認識してほしいことである。これを主な目的とする「孔子学院」が各地に建設され、儒学関係の典籍を

『大蔵経』に習って網羅しようとする『儒蔵』編纂事業も活発である。ナシヨナリズム云々はさておき、儒教倫理が東アジアの文化に果たした役割の大きさを見詰め直そうとする、一連の学術的なアプローチについて留意させておくことは、思想学習への関心を高める上でも大切であろう。

道家の思想

話は変わるが、私が教職に就いた昭和の終わりごろには、「エコロジー」ということはまだ耳新しかった。ところが、この二十年余、地球環境について取りざたされなるときはなくなつた。日々の文化的な営みの副産物が、地球規模の脅威となつて我々に襲いかかってくるのが実感されてきた。

人々の知的営為、文化の発達が大きな自然の営みを傷つけ、逆に人々を苦しめる、という警鐘を、二千年以上前に『老子』が鳴らしていた。そしてその思想は、今日と隔絶した大昔に存在し滅んだ、というものではない。儒家の思想とともに中国思想の二大潮流を形成する道家の思想と、それを教學の一つに持つ道教思想の源泉となり、禅文化などとも交流して日本にも大きな影響を与えてきた。

『老子』の「小国寡民」（第八十章）の章は、文字すら用いないですむ原初的な生活形態こそ、寡欲で争いのない社会を生む、ということを説いている。人間がより幸福になろうとして発達させる文化的営為こそが欲望を助長させ、戦乱を引き起こし、逆に人間を不幸にするのだと、痛烈に文明自体を批判する。『老子』の思想は、元来儒教の形式主義・教条主義の側面に対する批判などから生じたものであるが、人類を滅ぼす力を持つ兵器を、文明を発達させた結果生み出すに至つ

た今日こそ、そのことばの重さにだれもが瞠目させられよう。無論、地球環境についての具体的な言及はここにはないが、『老子』の逆説的論理には、我々の文明の発達が引き起こす大惨事に対して予言的な意味すらあつたことが知られる。

道家の思想の展開

後漢に本格的に流入した仏教は、南北朝期以降、統治の場において大きな力を發揮した。これに刺激を受けた在来の民間信仰は、仏教と交流しつつ徐々に整備され、道教として仏教と並立し、儒教を圧倒する時代も少なからず現出した。道教の成立とともに、老子は早くから太上老君として神格化され、『老子』の書は、その教學における根本經典となつた。やがて『莊子』『列子』もそれに続いた。王朝時代の後も、道教とそれを形成した思想とは、儒・仏と交流しつつ民間で流布し続けた。

既成の価値観から超越、そして万物斉同を説く『莊子』の思想は、芭蕉をはじめとするわが国の文人に大きな影響を与えた。庭園・家屋から太極拳をはじめとする体操・漢方薬に至るまで、大きな自然とともに生きるという価値観は、今なお東アジアに満ちている。これが、近代合理主義のアンチテーゼと目されてすでに久しい。そのような歴史的展開を学習者に気づかせていくことも、思想分野の学習を活性化させ、楽しいものとさせる一手となるう。

たき やすひで 清泉女学院中学高等学校（神奈川県）教諭。日中の古典学、特に江戸期の漢文学に関する研究を専攻。論文に〈齋藤拙堂「梅溪遊記」と『史記』貨殖列伝〉（漢文学解釈と研究）第十輯所収）などがある。

ことばの獲得

―異世代、異文化の人たち
との交流をとおして

北島公之

「さあ、泥縄状態にならんように、早い時期から大
学受験の過去問やるぞ！」
「先生、ドロナワってなん
スカ？」「インテリの君た
ちが、泥縄知らないの
か！」「あの一、インテリっ
てなんスカ？」

高等学校において、特に小論文や現代文の授業を行う場
合、強く実感するのは、ボキャブラリーの問題である。当
然知っているものと思っていたことばを生徒は全くわかっ
ていなかった。こんな経験が教師には少なからずあるはず
だ。このギャップが文章の趣旨にからんでくると、指導す
る上で致命傷になる。

何も、一切のことばの意味を説明せよ、と言っているの
ではない。我々には、ことばを獲得するに至った背景や歴
史がある。そうした、ボキャブラリーが産み出される環境
にもっと目を向けたい。

例えば、異世代の方々や異文化を有する方々との交流の
場を意図的に設定することだ。保育園に通っているわが家
の次男は5歳上の兄から、その兄は地域（ラグビースクー
ル）の先輩たちから、多大なことばの影響を受けている。も
ちろん、親や祖父母との会話のシャワーも血肉となってい
る。自分の家族・友人やそれ以外のコミュニティの人たち
とかかわり合いながら、我々は徐々に語彙を増やしている。

『国語表現Ⅰ』（三省堂）に、「クラス企画 ミニ講演会」や

「聞き書きの世界―身近な人の話を聞こう―」という単元が
ある。そこでは、ミニ講演会に向けた企画準備や身近な人へ
のインタビュースタイルなどが主に取り上げられている。

実際の講演会やインタビュースタイルで語られたことばには、生
徒の言語能力を育成する上で見落としてはいけない要素が
ある。まずは、異世代や異文化の人たちが用いる「ことば」
に注目させてみることにしよう。自分たちにとって異質なことば
を見つけ、派生させながら未知の世界を探り出していく。

「能楽師の皆さんが一番緊張する時は？」

「そうですね。装束をつけて鏡の間にいる自分が、名ノリ
笛に合わせて、これから橋がかりに出ていく瞬間ですかね」
以前に行ったミニ講演会での、ある能楽師のことば。こ
うした能楽テクニカルチームを、生徒はむしろ面白がり、自
分たちとは異質なことばを、さらには能楽の世界にかかわ
る人々について自ら調べ出していった。

また私は、漢詩の学習の中で、大学で学ぶアジアの留学
生たちと高校生をディスカッションさせたことがある。「こ
のことばを、どう言い換えればわかってくれるのか」。場の
設定で芽生えた他者意識が、彼らの言語感覚を鋭く磨いて
いくありさまをつぶさに感じとることができた。

自分のことばを見つめ直し、言語生活の向上につながる
ような取り組みをめざしたいものである。

きたじま ひろゆき

十六年間公立高等学校に勤務ののち、現
在、石川県教育委員会に勤務。ワキ方能楽師（下掛宝生流）と
して、時に加賀宝生の舞台にも立つ。

高校国語のこれから

— 新学習指導要領における
科目改訂について



高木展郎

平成二〇年一月一七日に中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」が出された。

その中で、国語の「改善の基本方針」は、国語科については、これまでのものと大きな変わりはない。

この基本方針をふまえ、高等学校の「(ii) 改善の具体的事項」は、次のように示されている。

○ 中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるようにするとともに、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるよう、各科目の構成及び内容を次のように改善する。

ここで重要なのは、「社会人として必要とされる国語の能力」ということであり、高等学校卒業時の到達目標が明確に示されていることである。

そして、各科目については、次のように示されている。

(ア) 「国語総合」は、現行の「国語総合」の内容を改善し

たものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

(イ) 「国語表現」は、現行の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものとす。「国語総合」の学習を踏まえ、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成するとともに、進んで表現する意欲や現代の国語の向上を図る態度をはぐくむようにする。

(ウ) 「現代文A」は、近代以降の文章を対象とし「古典A」と対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(エ) 「現代文B」は、現行の「現代文」の内容を改善したものとす。「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な種類の文章や資料を教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成するとともに、文字・活字文化に対す

る理解が深まるようにする。

- (オ) 「古典A」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語の役割、国語の成り立ちや特質についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。
- (カ) 「古典B」は、現行の「古典」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文や、古典についての評論文などを教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができるようにし、古典に対する関心と知識を高め、古典を読む能力を育成する。

また、単位数は、次の通りである。

国語総合	4	(必修科目、2単位まで減可)
国語表現	3	
現代文A	2	
現代文B	4	
古典A	2	
古典B	4	

これまでと大きく変わったのは、現代文と古典の内容がAとBとで差異化されたことである。特にA科目は「親し

む態度」の育成を目指しており、B科目において深く広く学ぶことが求められる。

ただ懸念されることは、B科目が、いわゆる受験科目としてのみ受け止められ、特に、古典において文語文法を中心とした訓詁注釈のみの授業が行われることである。

古典Bは、あくまでも「国語総合」の学習を踏まえており、「話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができる」ことを目標としている。

このことは、学校教育法（平成一九年六月改訂）に「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう」（第三〇条2項、高等学校は六二条で準用）とあるように、高等学校での教育内容は、生涯にわたる基盤を培うことであり、高校卒業後にも継続して学ぶ姿勢を育成することに意味がある。

現在、高等学校においては、学力の二極化が問題となっている。特に、学習意欲をどのように育成するかということが授業、わけても古典の授業の課題となっている。

平成一五年度に行われた教育課程実施状況調査においては、高等学校における古典嫌いは約七割にも及ぶということが報告されている。このことを、真摯に受け止め、高等学校教育における国語の授業を改善しなくてはならない。今回の科目の改訂は、授業改善を求めているのである。

たかぎ のぶお 横浜国立大学教育人間科学部教授。専攻は教

育方法学、国語教育学。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会主査代理、独立行政法人国立国語研究所評議員も務める。三省堂「明解国語総合」編集委員。

「敬語の指針」の考え方と

今後の学校教育に

おける敬語教育の

方向性



蒲谷 宏

1 「敬語の指針」の性格

「敬語の指針」（以下、「指針」）は、文部科学大臣の諮問に対して、二〇〇七（平成一九）年二月に文化審議会から答申されたもので、「敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たち」を主たる対象として、「社会教育や学校教育など様々な分野で作成される敬語の『よりどころ』の基盤、すなわち、へよりどころのよりどころ」として、敬語の基本的な考え方や具体的な使い方を示すもの」です。

つまり、「指針」は、あくまでも（へよりどころのよりどころ）なのであって、これを直接教育の分野などに持ち込むことを意図しているわけではないのです。したがって、学校教育においても、「指針」をよりどころとした、それぞれの状況や事情に合わせた「個々の指針」を作ることが大切になります。また、この指針で主たる対象としている敬語は、現代共通日本語の敬語であって、古典の敬語や方言の敬語全般についてまでを含んで述べようとするものではあ

りません。

2 「敬語の指針」における「敬語」の捉え方

「指針」では、「敬語」について基本的に次のように考えています。

○敬語は、人と人との「相互尊重」の気持ちを基盤とすべきものである。

○敬語の使い方については、次の二つの事柄を大切にすることがある。

①敬語は、自らの気持ちに即して主体的に言葉遣いを選ぶ。「自己表現」として使用するものである。

②「自己表現」として敬語を使用する場合でも、敬語の明確な誤用や過不足は避けることを心掛ける。

要するに、「敬語」が「相互尊重に基づく自己表現」として捉えられることの重要性を強調しているのです。敬語の形式面を体系的に整理することも大切なのですが、学校教育においては、そこだけに止まっただけではならないでしょう。

「指針」は3分類を5分類に変えた、という点だけが過度に注目されていますが、敬語の分類数自体は、それほど重要な問題ではありません。まず考えなければならないことは、敬語の持っている敬語としての性質です。それを明らかにすることが、結果として、敬語の分類の問題につながるものであって、分類が先にあるわけではありません。このことを特に国語教育にかかわる先生方には理解していただきたいのです。さらに言えば、「指針」が提示しているのは、実は5種類ではなく、尊敬語、謙讓語Ⅰ、謙讓語Ⅱ（丁重

語)、丁寧語、美化語、そして謙讓語Ⅰ＋謙讓語Ⅱの6種類なのであって、そのことはあまり問題にされていません。もちろん敬語の整理を複雑にしたいということなどではなく、「敬語的性質」が異なるものを同じ種類だと言って教えるのがよいのか、似た点はあるが違う種類なのだと教えるのか、そのことを考えてほしいという趣旨なのです。

また、敬語の名称や説明のための用語も、それだければならないというものではありません。筆者も個人的には、「尊敬語」や「謙讓語」という名称から脱却したほうが良いと考えています。

3 学校教育における敬語教育のあり方

端的に言えば、敬語教育は、語彙教育や文法教育ではなく、コミュニケーション教育として位置づけることが重要だと思います。そうすることで、敬語の持つ本当の意味が見えてくるのではないのでしょうか。敬語を単なる言葉として考えるだけではなく、それをコミュニケーション全体として扱っていくことが学校教育においても求められているのだと言えるでしょう。

特に高校生に必要なことは、「相互尊重に基づく自己表現」という敬語の理念と具体的な使い方との関連です。敬語の形式的な問題だけではなく、なぜ敬語を使う必要があるのか、敬語を使うことでどういう人間関係が築けるのか、といった根本的なことならと関連させて、具体的な使い方を考えるとよいのではないのでしょうか。「指針」第3章の後半では、敬語から敬語表現、コミュニケーションの問題へと展開しているのも、そのような思いが込められている

のです。最近では「空気が読めない」ことがよく話題になります。最近では「場」の雰囲気に合わせて合わせるだけでなく、自らが「場」の状況を変えていく力を持つことが真の「自己表現」につながることも重要な点になるでしょう。

人と人がよりよい社会を作ること、そして、人が人としてよりよく生きていくための知恵としての文化を受け継いでいくこと、そうした意味でのコミュニケーション教育の観点から敬語を生かしていくことが期待されるのです。

【参考文献】

『国語表現Ⅰ 改訂版』（二〇〇七）『国語表現Ⅱ 改訂版』（二〇〇八）

三省堂

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（一九九八）『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子（二〇〇六）『敬語表現教育の方法』大修館書店

教育の方法』大修館書店

蒲谷宏（二〇〇七）『大人の敬語コミュニケーション』（ちくま新書）

筑摩書房

『教育委員会月報（特集）敬語の指針』文化審議会答申について（二〇〇七年五月号（第五九卷二号））文部科学省

年五月号（第五九卷二号）文部科学省

かばや ひろし 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。専

攻は、日本語学・日本語教育学。おもに、待遇コミュニケーション（教育）論。文化審議会国語分科会委員を務め「敬語の指針」の作成にも参画。三省堂「国語表現」編集委員。

返り点の指導一案

— 『高等学校国語総合 改訂版』

を使って

池田 宏

漢文の入門期に、□の中に、返り点に従って読む順番に数字を入れるという練習を通じて返り点の使い方を習得させるという方法を、以前はとっていました。パズル感覚で生徒たちにはなかなか好評なのですが、ある時期から、このやり方をとらないことになりました。それは、必ず次のような間違いをする生徒がいて、その間違いがなかなか正されないからです。

□ □ □ □

という問題を出します。もちろん正解は

③ ① ②

ですが、

② ③ ①

という間違いをする生徒が必ずいるのです。それは「①」点がついているから、そこを一番目にしてしまうという間違い

いなのですが、これを

学_二漢_一文_一

という問題にしたならば、「文」を一番目に読むことはありません。なぜなら、どう見てもこれは「漢文を学ぶ」という意味の文であり、「文」↓「学」↓「漢」の順に読んだのでは意味が通じそうにないことがわかるからです。また、□に数字を入れることで返り点を覚えてしまうと、高学年になっても、漢字の横に番号をふって読む生徒がいることも、こうした返り点の指導を見直すことにならなければならない。

では、今どんな方法をとっているかというと、生徒自身に返り点の使い方について気をつけるという方法です。

返り点・送り仮名を付した漢文と、その書き下し文を示したプリントを用意します。例文は教科書『高等学校国語総合 改訂版』（三省堂）の「訓読のしかた」の例文を使います。

王好_レ戰_ニ。(王戦ひを好む。)

転_レ禍_ニ為_ス福_ト。

人生感_ス意_ニ氣_ト。(禍ひを転じて福と為す。)
(人生意気に感ず。)

吾日_二三省_ス吾身_ト。(吾日に吾が身を三省す。)

客有_下能_レ為_ス鶏鳴_ニ者_ト。(客に能く鶏鳴を為す者有り。)

不_下為_ス兒孫_ニ買_ス美田_ト。(児孫の為に美田を買はず。)

他山之石_ニ可_レ以_テ攻_ム玉_ト。(他山の石、以て玉を攻むべし。)

生徒に、書き下し文と、訓点のついた漢文とを比べさせて、「レ」とか「一」「二」などという記号の働きを考えさせるのです。「レ」点は、下の字から、すぐ上の一字に返って読む。ということを生徒自身に気づかせるわけです。こうして返り点の働きを自力で理解したうえで、最初の教材である「五十歩百歩」で、下段の書き下し文と対照して返り点の働きの確認させると、生徒たちは「大いに納得」ということになります。

いけだ ひろし 駒場東邦高等学校（東京都）教諭。

身近な事例で例証して

いく論説文を理解し、

レトリック感覚の意味を

考察する

——「コインは円形か」(新編国語絵

合 改訂版) を使って

奥園哲也

一 はじめに

高校生になって初めて出会う評論の教材としてこの作品を選んだ。文章読解が苦手だと考える生徒に対して、身近で興味・関心を引くレトリカルな例文が適切に引用されている本教材で、そのおもしろさを味わわせ、筆者の論理を追い、その主張を考察することから、論理的な思考力を身につける糸口にしたいと考えた。

二 教科書を開く前に

学習活動として教科書を読む前に、「各自ノートに百円玉の絵を描いてみなさい。」という指示を試みた。何の説明もしない状態で行わせたので、「なぜ国語の授業で絵を描かせるの?」という疑問を

持った生徒も多かったようであるが、とりあえず指示に従って描いていた。机間を回ってのぞいてみると、予想通りほとんどの生徒が円を描いて中に100と描いている。さらに三名ほど指名し、ノートに描いた絵を板書させてみた。二名は円の中に100、もう一名もほぼ同じだが、多少斜めから見た形で、側面のギザギザ部分を丁寧に描いていた。

その後、教科書の音読に入り、やっとその意図を理解したようである。

三 第一段落読解

「コインは円形である。……自然

「コインは長方形である。」…異様

同格であるはずの二つの文を比較して後者に違和感を感じるのは、我々人間の認識の一面性、有限性のためであると指摘する部分を理解させたい。実際、前述の絵においても三十数名全員がいわゆる円形の百円玉を描き、教科書のイラストにあるような完全な長方形(短い棒状)の絵を描いた者はいなかった。コインの例以外に同じ対象でも違う認識ができるものを考え発言させた。

「タイヤは円形・長方形である。」

「缶ジュースは長方形・円形である。」

円柱形以外のものでも考えさせた。

「ピラミッドは三角形・四角形である。」

「おにぎりは三角形・長方形である。」

日常生活の中で視点が定まってしまいがちな対象物を、別の視点からとらえさせる取り組みやすい発問で、思ったより積極的な姿勢で多くの発言があった。

四 第二段落以降

人間の認識は一面的なものであることと、それは言語表現に反映されることを認識し、人間などに対しても人によって見方が異なることを自覚させたい。「○○先生(担任)をどう思うか?」という問いに、優しい、おもしろい、かわいい、怖い、しつこい…などさまざまな意見があった。これらを並べると、実際の人間像には多様な側面があることに生徒たちは気づいた。ここをもとに、筆者の言う「認識と言語表現の避けがたい一面性を自覚し、相手の立場や別の視点に立つてものを見ようとする努力」というレトリックの意義を考えさせ、「国際化社会」といわれる今日、人のできるだけよく理解するための術としてレトリック感覚の必要性を考えさせた。

おくぞの てつや 東京学館船橋高等学校

校(千葉県) 教諭。

三省堂『明解国語総合』 を使用して

——実業校の実態に即した使い易さ、
わかり易さを実感

石川孝邦

本校においては、平成十九年度は三省堂の『明解国語総合』を総合学科の一年生に使用した。本校では平成十九年度までは総合学科はくくり募集を実施していないので、各系列に分かれる前の、いろいろな進路を志望する生徒たちの集まるクラスである。本校の総合学科の門を叩いた生徒たちの多くに共通している点は、学習嫌いだということである。文部省（現文科省）が提唱した「ゆとり教育」は結果として学力の二極化を生んだように思われる。

「ゆとり教育」に満足できない親たちは小学校の低学年より学習塾に通わせ、また公立の小学校では満足できずに私立の小学校に入学させようといわば「お受験」をさせて、より高度な教育を受けさせようとする。

中学校を経て高校に入学するころには学力の格差は非常に大きなものになって

いる。ここ北九州の地の「ゆとり教育世代」のいわゆる勝ち組たちは県外の難関私立高校が県立の上位校へと歩を進めていく。そのような中で本校の総合学科に入学してくる生徒たちはそれとは異なる。したがって入学時の学力はそれほど高くはない。しかし、能力がないというわけではない。私が思うに「ゆとり教育」の結果、学習の方法を知らないだけなのである。磨けば光る原石たちもその中には多くいる。だから時間をかけてしっかりと磨いていけば飛躍的にその能力を伸ばしていく者たちも多いのだ。そのような本校総合学科の現況にしっかりと馴染む教科書が三省堂の『明解国語総合』であった。入学したばかりの生徒たちにいきなり高度な内容を持ち込んで本校では拒絶反応を起こすだけである。導入の教材として「希望」「一瞬を生きる」は本場に適当な教材と思う。特に「一瞬を生きる」はその最も主題の部分が最後にあるので生徒たちはぐっとその世界に入り込んでいくように思う。また入っていきやすい内容でもある。さらに、教科書が大判なので書き込みができるスペースがたくさんある。本校生徒は入学時ではまだ工夫して自分独自のノートを作成する方法を知らない。したがって教師の板書をただ書き写すだけである。それは内容を本当に理解するのは難しい。しか

し、教科書に書き込みのスペースが多くあるので、直接内容に即したエピソードや大切な部分の説明をメモ的に書き込むことができる。そしてより詳しく板書し、ノートに書き写させるのである。この反復がよ

り生徒の理解度を深めていくのである。また、教師の側から言っても板書計画や授業内容を書き込めるスペースがあることは非常に便利でありがたい。

古典分野においては、それぞれの単元の後に文法内容を設けてあるのがよい。本校総合学科では、独立して古典文法の時間を割くことはできない。だから、単元の後にある文法内容が頼りなのである。その構成や内容が本場にわかりやすくよいのである。さらに漢文分野の内容についても、特に漢詩の形式の説明などは少ないスペースに必要不可欠なポイントがきちんとまとめられており、生徒の理解度も高かった。また、挿絵や写真の挿入のしかたも的を得ていて非常によい。

文部省も文科省となり「ゆとり教育」に対して見直しを余儀なくされているようである。そのような中でこの三省堂の『明解国語総合』は一石を投じた一冊であることにまちがいはないものと思う。

いしかわ たかくに 真颯館高等学校

(福岡県) 教諭で豊前小倉清水寺住職。

〔三省堂国語教科書〕訂正のお知らせとお願い

三省堂国語教科書の平成19年度版に訂正の箇所がございます。以下の通りです。ご指導の際にご留意くださいますようお願い申し上げます。なお、平成20年度より、訂正した教科書を供給いたしております。

	頁	行・箇所	平成19年度版	平成20年度版
『高等学校国語総合』 改訂版	62	筆者紹介4	『科学技術と人間』	『現代史への視座』
		目次(Ⅶ) 3	韓愈	韓愈
	141	12	最後の見張りに付かせたときは	最後の見張りにつかせたときは
	145	14	座っていたりするような時に	座っていたりするようなときに
	211	下段図版下	『絵本徒然草』第十三段絵	『絵本徒然草』第二三段絵
	260	上段10	「あかねさす一日・朝・光・紫など」	「あかねさす一日・光・紫・君など」
	265	注①	現在の栃木県那須郡黒羽町。	現在の栃木県大田原市の黒羽地区。
	274	地図内文字	長江 江水	江水(長江) (削除)
	301	作品見出し	かんぼう 千宝	かんぼう 千宝
	304	作品見出し	韓愈	韓愈
		近現代文学史年表 一九六〇	考へるヒント(小林秀雄)	〈一九五九年の項へ移動〉
		近現代文学史年表 二〇〇一	つきよみ 月夜見(増田みず子)	つきよみ 月夜見(増田みず子)
『新編国語総合』 改訂版	181	筆者紹介4	アフォーダンス』、訳書に『情報と生命』	アフォーダンス』、『情報と生命』
	283	地図内文字	長江 江水	江水(長江) (削除)
	332	下4	し、北東を「艮」、南東を「巽」、南西を「坤」、北	し、北東を「艮」、南東を「巽」、南西を「坤」、北
	332	下段 方位図	(辰巳)	(辰巳)
		近現代文学史年表 一九六〇	考へるヒント(小林秀雄)	〈一九五九年の項へ移動〉
		近現代文学史年表 二〇〇一	つきよみ 月夜見(増田みず子)	つきよみ 月夜見(増田みず子)
		後見返し裏 旧国名・都道府県 対照図	出雲(鳥取) 隠岐(鳥取) 石見(鳥取)	出雲(島根) 隠岐(島根) 石見(島根)
『明解国語総合』	35	注②	格子	格子
	71	上段15	(輪が回っているところに、)	(輪が回るにつれて、)
	77	注⑨	襖	襖
	174	上段11	「已に然り」(既にそうなっている)という	「已に然り(既にそうなっている)」という
	195	上段11	表示されている__	表示されている。
	206	18	じゃ、私の顔が見えるかい	じゃ、私の顔が見えるかい
	209	13	思うような眉や鼻が	思うような眉や鼻が
	223	下段7	さんまが群らがつて	さんまが群がつて
	229	注④	植木等 [一九二七~]	植木等 [一九二七~二〇〇七]
	232	3	じゃないかと思って……」	じゃないかと思って……。」
	248	下段行番号	おもしろい。 であるのに、25	おもしろい。25 であるのに、
253	注⑤	けいゆうこうせん 計有功撰。	けいゆうこうせん 計有功撰。	
『明解古典講読』 日本の説話	55	下段2	斗升之水、然活耳。君乃言可此。	斗升之水、然活耳。君乃言可此。
	55	下段3	曾不如早索我於枯魚之肆	曾不如早索我於枯魚之肆
	72	4	(第二十八 尼ども、	(卷二十八の第二八 尼ども、
	78	4	常に夫に	常に夫に
	80	1	夫いとほしがりて	夫いとほしがりて
	112	表上段後ろから3	ども 逆接の確定条件	ども 逆接の確定条件
112	表中段2	を 逆接の確定条件、単純な	を 逆接の確定条件、単純な	